

作家 澤井 繁男さん

「真摯」という言葉の低落



左の記事を読んで、下の問いに答えましょう。

1 傍線部を具体的に述べている部分を、本文中から45字以内で抜き出し、最初と最後の3文字を書きましょう。

--	--	--

～

--	--	--

2 空欄ABに適語を入れましょう。ただしBは本文中から漢字3文字を抜き出して入れましょう。

A	
---	--

B			
---	--	--	--

私たちは口から発した音、言ったこと「言葉」に、責任をもたなくてはならない。また、同じ言葉を繰り返して使う（発する）うちに、その言葉の意味がすり減ってゆき、本来の意味を失い重みがなくなってしまう点も承知しておくべきである。

その最たる例の一つとして政治家が答弁に濫用する「（それにつきましては）真摯に受け止めます」がある。「真摯」とは、「真面目にひたむきな姿勢なこと」を指す。与党や地方自治体の首長が、何らかの失態を犯すと、不遜な顔をしつつも「真摯に…」と答えることが常だ。けれども、答えた言葉の意味に見合った行動を取り、自己改善に乗りだす政治家はほとんどみられない。政治家は、医療ミスや企業の粉飾決算の修正で記者会見する、医師や会社役員と違って、頭も下げない。

「真摯」は実行に移された試しをみないので、もう言葉としての威力・効果はほぼ薄れてしまっている。悪い意味での「自己保存」において、自己撞着すら感じる。もう「真摯」を用いないでほしい。嘘偽りを地で行くことになっている。「真摯に…」と発言したら、それを「真率」に実行してほしい。「真率」とは「正直に、一途に」の意味だ。正直であってほしいと願う。

右のような発言が続くと、うんざりして政治に幻滅するし、瞋恚も来す。拙稿執筆の起因もここにある。例えば、石破茂首相は予算委員会での回答時に、マイクだけに向かって

「真摯に…」と述べて、国民に目を向けない。斎藤元彦兵庫県知事も謝罪はいつも同じ「真摯に云々」あるいは、「重く受け止めています」だが、無表情なので、真心が伝わってこない。この人は事務能力にたけているかもしれないが、人情の機微に疎いに違いない。再選されても、いろいろな「悶着」が尾を引いていて見苦しい。

更迭された江藤拓農林水産大臣の「受け狙い」で、恥知らずの、国民の気持ちを逆なでする、コメについての生活感覚が欠落した暴言にも、あきれてしまう。政治家には生活者への目配りが必須である。また「盛り上がる」ももう意味を失っている。「活気づく」「高揚感にあふれる」とか、他に表現があるのに、アナウンサーや司会者の語彙力を疑う。専門とするイタリアルネサンスで、メディチ家出身の教皇レオ10世（在位1513～21年）は、文化興隆に贅を尽くしたがために、出費が激しく、ヴァティカンの金庫を空にした。そこで煉獄（浄罪界）にて、火で身を浄めた後に天国に行くはずであるところを、煉獄を経なくとも天国に直行できる免罪符を改悪発行して、ぼろもうけた。

教会のこうした腐敗ぶりに抗議して1517年、宗教改革に打って出たのがAだ。理由はこれだけでないが、言葉もお札も乱発すると価値がなくなるといふ良事例である。真摯という言葉がBになっ

NIEワークシートのこたえ（2025年7月1日公開）

◆ワークシート「真摯ってなに？(国語 社会)」 2025.6.29付 朝刊 4面 解答

1 答えた ～ ない。

2 A マルティン・ルター (ルター)
B 免罪符